北京日記抄（一九七六年一月）

――周恩来逝去前夜――

吉田富夫

今年（一九七六年）の一月二日から七月十三日まで、ぼくは北京大学の招待で中国に滞在した。主要な目的はふたつあった。ひとつは、京都大学の井上清教授が北京大学で日本近・現代史を講義されるに際して、翻訳その他のお手伝いをすること、もうひとつはぼくの専攻分野である中国現代文学の勉強をすることであった。

激動の半年という表現は、あまりに月並であるかもしれない。しかし、この半年の間に中国が経験したことは、まさに激動の二字をもってよばわるにふさわしいものがあった。ぼくは一月二日、井上清氏とともに十年ぶりに北京の土を踏んだのだが、それから一週間目に周恩来総理の死にぶつかった。時間が流れて、異常気象としか思えないやけに涼しいことしの北京の夏がやってきて、そろそろ帰国準備で心落着かぬ七月四日の夜、こんどは朱徳委員長逝去のニュースに一驚した。そしてその日は、その時点ですでに確定していた帰国予定日（七月十三日）の一週間前にあたっていた。こうして、

ぼくたちの半年間の中国滞在の時間表の上には、その両端から一週間ずつ縮めたところにふたりの指導者の死が書きこまれることになったのである。

これはまったく偶然のいたずらにすぎないけれども、帰国後、口のわるいぼくの友人のひとりは、お前たちは中国にとって厄病神だったのとちがうかといった。あまりうまくもないこうした冗談をとばしたその友人にしても、その軽口とはうらはらに事態を深刻にうけとめていることは明らかだった。多少予感的にいえば、この半年間は、中国現代史におけるひとつの転換点だったのではないか。ふたりの指導者の死は、その転換を消極のかたちで示した。それを積極のかたちで示せば、教育革命の深化、各分野における批判運動の展開、鄧小平批判等々ということになるだろう。そして、四月五日の天安門事件がその頂点をなした。

とはいうものの、ではその転換点とはどういう意味かと開きなおられると、それはこうだといい切るおぼえがぼくにない。それに、だいいちここは議論の場所ではない。そういうわけで、中国滞在印象記をという編輯子のもとめに応じて、ここでは滞在初期の日記の一部を抄して責をふさぎたい。折にふれて感想めいたものを綴った日記に一貫性はないけれども、せめて一九七六年にふみこんだ当初の北京の空気がいくらかでも伝わるならば、というのが筆者の気持である。なお、写真は日記のなかみと関係なく、滞在中に随時撮影したもののなかから選んだが、はじめのころはカメラをほとんど手にしなかったので、使えそうなものがほとんどないところからくる苦肉の策である。

（一九七六・八・二一）

一月二日（金）

午後五時二〇分、中国民航機で大阪空港を発つ。大学から、水谷事務局長、吉江教授、狭間助教授、事務局の石井氏などの方々が見送りにきてくださって、恐縮する。正月の二日だ。乗客は四〇人ばかり、農業関係らしいアメリカ人の団体、それに在日華僑とみえる一家族。上海空港で夕食をすませてふたたび機内にはいってみると、乗客はぼくらをいれて六、七人に減っている。これでは儲からへんやろと、井上清氏とはなす。星がきれいで、地上にときおり街の灯が光のうずのようにひろがる。

午後九時三十五分（北京時間）、北京空港に着く。麻子英、張俊彦、張光珮、李国秀、厳紹璗など一九七四年秋に来日された北京大学社会科学友好代表団で顔なじみの諸氏、それに北大外事組の王奎氏、歴史学部の張万蒼、沈仁安両氏などが迎えてくれる。顔なじみはありがたい。だれそれは元気か。ことしの北京の冬は暖かでしてね。そういえば、かれらは例の綿入れのごつい外套は着ていない。がらんとした空港ビルに、シャンデリヤがまぶしい。

空港から宿舎の友誼賓館にむかう車中で、麻子英氏が、今夜北大中文学部では新しく発表された毛沢東主席の詞二首を学習する大会を開いたという。一九六五年に作られた毛主席の詞二首は、『人民日報』一九七六年元旦社説とともに、一昨日おおみそかの夜に北京中央人民放送局がラジオで流した。それをぼくは短波できき、その高い調子にある種の予感

をもった、なにか新しい大運動がまきおこされるのではないか、と。うすいもやのかかったような外灯の光のなかにうかびあがってはすばやくうしろに流れさってゆく並木を眼の底に残しながら、未知の世界を前にしたもののようなたかぶりをおぼえる。それと重なって、十年前（一九六六年）のちょうどこの季節に二ヵ月をこの地ですごしたときの記憶がきれぎれに頭の中をよぎる。

一月三日（土）

終日好天。下着を一枚減らす。

午後井上清氏の部屋に、北京大学から仕事用の書架が運びこまれる。どうやらこの友誼賓館というところは、北京市の管理下にあって、それを北大なら北大が北京市から借りるシステムになっているらしい。ベッドや応接机に椅子などは備えつけがあるが、長期滞在に必要な道具は居住者が自分でそろえねばならぬ。部屋のつくりがなにかとバカでかいのは、本来ソ連の専門家のために建てたというその歴史に由来するに相違ない。

北京大学との打合わせで、井上氏の日本近・現代史の講義は五月中旬まで、開講は今月九日ときまる。打合わせの間にも、周栄鑫教育部副部長批判のことが話題になる。周副部長は去年の七・八・九の三ケ月、あちこちで間違ったことをしゃべりちらした、と。そういって笑う北京大学のひとびとの表情には、圧倒的な自信が感じられる。また、理科系卒業予定者のうちの七〇人あまりが、断固としてチベットに根をおろすことを要求し、ちかく出発するともいう。辺境の社会主義建設に青春を献げようという意気ごみはわからぬでもないが、なんだかモッタイナイという気はするのだ。

メーデーの日，天安門前
（右から廖承興氏，井上氏，筆者，張光珮氏）

一月四日（日）

夜中に目が覚めた。背中のあたりが痛いのは、あまりにスプリングのききすぎたベッドのせいだ。窓の外をザザッという音が通りすぎる。小雨のぱらつく音ににているが、あれはきっと霰かなにかだ。そのうちに、また眠ったらしい。

七時すぎ、すこしズキつく頭をかかえて起きだしてみると、霰の降った気配はない。三階の窓からしばらく観察していてわかった。中庭の植込みの樹々の梢が風でふれあって、小雨のぱらつくような音をたてるらしい。いわゆる楊柳という樹だろうか、巨木から枝がふとい糸のように垂れさがっている。風に吹きちぎられた細い枝がひろい庭のあちこちに吹き寄せられている。梢をカラカラ鳴らして風が吹きぬけると、着ているものをとおして寒さがつんと肌にしみとおる。そうなると、すこしくらい身体をうごかしてみても、もう

暖まりはしない。

賓館の正門の前には、小さなマーケットがあって、双楡樹市場という。食品から台所用品、衣類、電機製品、写真館も銀行もある。北京市の西の郊外区のこのあたり、バス停で三つか四つごとにこうした市場がある。十年前には、ツギのあたったものを着たひとがかなり目についたが、今日市場を歩いたところではまずいない。乗っている自転車も新品のピカピカが多い。八億の人口ということを考えると、この変化の意味は大きい。

一月七日（水）

夜、北京大学革命委員会主任王連龍氏の招宴。王連龍氏は、文化大革命のなかで北京大学に進駐してきた労働者毛沢東思想宣伝隊の指導者で、現在の地位はわかりやすくいえば北京大学学長である。どんなにコワイひとかといささか緊張していたが、実際の王氏は飾り気のない農民の風貌をもったひとであった。

陝西省の貧農出身で、毛沢東の警備隊長をながくやっていたひとだとあとからきいた。五十歳台のなかばだろうか。背はあまり高くなく、小肥りで血色のよい顔にやや細めの目。おつむはもうかなり後退しているが、白髪ではない。ナマリのあることばで、ゆっくりと話す。同席は、歴史学部の周一良教授はじめ、張万蒼氏、外事組長倪孟雄氏などすべて知識人だが、そのなかに貧農出身の王氏がでんと座っている図柄は、なんとも愉快だ。王氏は老眼鏡をかけてメニューをながめてみたり、テーブルにかがみこんで皿の料理をパクつくことに夢中になったり、井上さんに茅台酒で乾杯をすすめたり、タバコをふかしてみたり、熱くなってくると服のボタンをはずして椅子に横坐り気味になってみたり、まったくとらわれるところがない。ときどき、教育革命のことにひっかけて、ふるい大学の観念にしがみついているひとびとを皮肉る冗談をいって笑わせたりもする。ながめていて、こういうのを自在な振舞いとでもいうのだろうと考えた。学歴ということになれば、正式には小学校も出ていないのではないか。しかし、王氏には貧農というその出身と毛沢東のそばにあって革命を担ってきた経歴とからして、この国の行くべき方向について微動だにしない大樹のような信念が燃えているにちがいない。こうしたひとを北京大学のトップにすえているところに、この国がいま教育なら教育の分野でやろうとしていることの大きな意気込みと目指している方向とをみることができるように思う。

長城にて（左から張万蒼氏、筆者）

一月八日（木）

北京空港に日本に帰る代表団を見送った帰途、王府井の百貨店で炊事用具を買込む。売

場はかなりの混雑ぶりだが、売場のおじさんは一向にせかせかしない。ナベならナベを、あれといって指定すると、その種類のをいくつか持出してきて、あれこれくらべてみていちばんいいのを選んでくれる。これはぼくらが外国人だからそうするのではなく、みていると中国人の客にもそうしている。もっともこれはすべての服務員がそうであるわけではなく、ハシを買いにほかの売場にまわったらわかい女性の服務員がガラスケースの中の一番上の一包みをひょいと投げてよこした。

一月九日（金）

周恩来総理が没くなった。

七時過ぎの食堂でO氏から耳うちされて、一瞬息をのんだ。まったく予想しないではなかったものの、しかしこんなにはやく……

今日は九時から井上氏の講義の開講懇談会がある予定だが、これは中止になるのではないかと井上氏と話し合う。

しかし、八時十分、張万蒼、張光珮の両氏はやはり迎えにきた。双方、ほとんどことばにならず低くひとことふたことつぶやくのみ。

九時過ぎ、受講者全員（三十二人）との第一回対面懇談会。最初に受講者のうちの責任者である北大歴史学部の沈仁安氏が、周総理の逝去を悼んで一分間の黙悼を提案。なるほど今日中国の全国各地はこうして朝が始まったのかといったとりとめのないことが、きれぎれに頭にうかぶ。あいさつ、講義についての希望、すべては型どおりにすすんだが、沈んだ雰囲気はとけない。

賓館に帰って、十二時のニュースをきく。総理逝世の訃告を読むアナウンサーの語尾が、あきらかにふるえている。喪送の曲が流れる。その時ぼくは涙を流した。

今日から寒くなった。太陽は明るく照っているものの、風が葉を落した庭の樹々を吹きぬけてゴーッと音を立て砂塵をまきあげる。二枚重ねた下着をつきぬけて寒さが肌を刺す。なにか平静な気持ちでない。今日のラジオに音楽はない。

夜の放送で、周恩来総理治喪委員会が外国からの喪儀参加を謝絶する旨の公報を流し、意外の感あり。従来の慣例と儀式の簡略化のためという。なるほど、周恩来といえども例外を認めないスジのとおしかたに、背すじをどやしつけられたようなきびしさを覚える。

一月十日（土）

日記をつける段になって、周総理の逝去が昨日であることに気がついてがく然とする。もっと日が経ったように錯覚していたのは、ぼくの神経もいささか異常をきたしているのだろう。午前中、張光珮女史と双楡樹市場に台所用品を買いに出かける。なにしろすべてが大ぶりで、庖丁は刃渡り四十センチもありそうだし、マナ板はまるで洗濯板ほどの大きさ、いささかひるんだがいたしかたない。人の出も少ないし、笑い声や叫び声はない。市場は黙々としていて、ひとびとは顔をふせ気味だ。夕方気がついたが、賓館の正面に飾ってあった〝慶祝元旦〟と書いた大きな額がはずされていた。

夕方、U君夫婦を訪ねる。U君夫婦はこちらに来て三年目、北京第二外国語学院で日本語を教えている。かれらによれば、かれらの学校の学生は昨日はどれも目を真っ赤に泣き腫らし、今日も一種異様な雰囲気で自然休講、みんな訃告の学習をしているようだったという。たぶん、全国の学校がそうなのだろう。またU君夫婦によれば、昨年暮れ、康生政治

局員が没くなったとき、第二外語の学生のなかには、一瞬周総理のことではないかと思ってはっとしたというふうにいっていたものもいたという。このことを逆に読めば、周恩来の病状が切迫していることは昨年末の段階でなんらかのかたちで中国のひとびとには知らされていたということにもなろう。とすれば、この元旦の毛主席の詞の公表、『人民日報』元旦社説の高い調子、毛主席とニクソン令嬢との会見など今年初頭の調子高いなこの国のすべり出しは、あるいは周総理にこの日のあることを予想したうえでの布石であったのかも知れぬ。康生より先には、董必武副主席の死があった。巨星隕つ——。この国の革命は、明らかにひとつの曲り角をむかへた。

大寨生産大隊で出会った陳永貴副総理
（左ムキワラ帽子の人）

一月十一日（日）

二度目の日曜日。冷凍豚肉、白菜、モヤシ、豆腐などで昼食をつくる。井上さんもぼくも料理にかけては自信（？）のあるほうなので、大論戦。結果はまずまずだが、この国の醤油はやたらに色が濃いくせに味がうすい。京都風の味つけになれたぼくらには、ちょっと使いにくい。

午後、バスで市内に出てみる。動物園で乗り換えて約一時間、西単で降り、電報大楼前の郵便局で雑誌を買い、天安門のほうに歩いてみる。日曜日のせいか人通りも多く、広い車道の両端を自転車が列をなして走る。交通整理の公安がときどきマイクで叫ぶ。親子連れ、グループらしい少年、解放軍の兵士、いつもの風景だ。毛主席以下の要人の居住区である中南海の門の前の半旗の五星紅旗が、風で旗竿になかば巻きついてたれさがっている。そちらをみながら、そのときだけ一様に声をひそめる気配がある。天安門前の広場には、テレビカメラのセッティングがすすめられている。要人を乗せているらしいホロを下した黒のセダンが何台も人民大会堂にすべり込んでいく。王府井まで歩いて、さてひきかえそうと思うと、どのバスも超満員。時計をみると四時、街へ出たひとたちがそろそろひきあげる時間帯にかかったらしい。ようやくの思いでその一台に乗って天安門前にひきかえすと、つい一時間ほど前にはなかった巨大な人垣が長安街の両側にできていて、それが西単をこえてまだ西に続いている。交叉点には、アイモを手にしたひとの姿もみえる。周総理の遺骨が、明日弔問式の行なわれる労働人民文化宮に帰ってくるのであろうか。バスを降りてその人垣にくわわってみたい誘惑にかられるが、鉛色の空がはや暮れなずみはじめたとなればいささか心細くもありあきらめる。ぎゅうぎゅう詰めのバスの吊り皮に窮屈な恰好でぶら下がっていると、周総理の死という大事件のなかでも、この国の巨大な大衆の生活の流れは一瞬も止むことなく、音を立てて

流れていると実感される。

一月十二日（月）

九時三〇分賓館を車で出発、労働人民文化宮の弔問式にむかう。式は今日と明日の二日間、外国人ははじめの日の午前中と決められている。晴天。腕に喪章を巻いたひとの姿が目立つ。車中、張光珮女史によれば、多くの大衆が総理の遺体を火葬にせず、保存するよう要求して国務院に出向いたという。しかし、祖国の大地に還りたいという総理自身と遺族の希望で、昨日荼毘に付した、うんぬん。遺体保存というなまな希望のなかに、中国の大衆のむっとする汗くさい息使いがきこえてくる気がする。真の革命家は、その死においても大衆となまなつながりをもつということなのであろうか。

車が長安街に出ると、胸に白いバラの造花をつけた中学生らしい列がいくつもみられる。天安門に向って右側の労働人民文化宮の前には、「工作人員」と書いた白いプレートをつけた立礼のわかいひとたちがほぼ一メートル間隔で両側に並んで、一種の通路をつくっている。ぼくらは案内されて、二列になってその通路のなかをすすむ。通路は、文化宮の中庭にも敷石にしたがって折れ曲りながら続いている。単調で重々しい喪送の曲が、時に高く時に低く、流れる。ぼくらのすすむ中央の敷石からはずれた右側には、十列くらいで中国の人々がびっしりとつまっているが、かれらは外国人の弔問の終るのを待っているのであろうか、身じろぎもしない。弔問を終えた外国使節がそれぞれの国ごとに、正面に向って左側の敷石を踏んでひきかえしてくる。あれはどういう人なのであろうか、年取ったヨーロッパ人らしい老婦人が両わきをかかえられながら石段を降りてくる。介添役の中年の中国人の婦人が激しく泣きじゃくる。石段を昇ってひとつの建物を通りぬけ、石段を降り、ふたつめの建物で署名簿に署名し、みっつめの建物の石段を昇る。花環が両側にならんでいる。建物の入口から右側にすすむ。中央の要人らしいひとびとが並んでいる。いちばん手前の華国峰氏だけはわかったがあとはわからない。張光珮女史が小声で「井上清先生」と紹介する。涙をいっぱいにうかべたひともいる。ひとりひとり握手して、奥にすすむ。正面に周恩来総理の巨大な写真、その前に遺骨。黙悼を献げる。映画撮影の照明が光る。なにかが終ったという墜落感がおこった。そうして、左にまわって遺族のひとびとに黙礼したはずなのだが、不思議とそこの記憶がとぎれている。気がつくと、出口にむかう石塁を歩くぼくのうしろで、文化宮の入口から案内にたってくれた青年がすすりあげていた。

それにしても文化宮を出ると、そこはあまりにもよい天気であった。乾いた空気は肌を

雪の北京郊外

さすものの、春を想わせるような陽光が一面にふり注ぎ、雲ひとかけらみえぬ。入るときは柱にまきつくようにしてうなだれていた半旗が、いまは風に軽くはためいてみえる。このとき、中国のひとびとの心にぽっかりとあいた穴の存在をぼくは実感した。喪儀とは、残されたものの悲しみをまぎらすためのまつりであるのかもしれね。しかし、それにしても、なんという質素な喪儀のありかただろう。

帰途、車を建国門外の友誼商店（外国人むけの専門店）にまわして、台所用品の買物。服務員は、全員喪章を巻いているが、茫然として仕事にまるで身がはいらぬ様子。こちらは、居候の居心地のわるさすら感じる。

午後、ラジオが革命歌とインターを流している。夜、講義の受講生の代表四人来訪、十項目からなる主要質問要項を井上氏に提出する。

一月十三日（火）

夕方七時から、賓館のクラブで周総理の遺体に別れを告げる中央指導者のテレビニュースをみてショックをうける。現代中国の中央指導者は、トシをとりすぎている！

遺体の置かれているのは、病院の中庭であろうか。ここのカラーテレビは緑であるべき色がブルーにちかくみえるのではっきりしないが、アナウンサーの説明によれば、花と松にかこまれ、中共党旗に胸までおおわれて遺体は横たわっている。告別のひとは、入口を入って遺体に黙悼し、遺体の置かれた祭壇をひとまわりして、最後に出口のところに立っている周恩来夫人の鄭穎超女史におくやみをのべて立ち去るのであるらしい。

最初に、入口をいっぱいにしてふさぐようにして、厚い毛皮の外套と防寒帽のままの巨大な人物が映される。一瞬『三国志』の関羽を想わせたその人物は、きわめてゆっくりと画面を横切り、祭壇をめぐり、カメラがきりかわって鄧穎超女史と握手し、画面から消えた。朱徳であった。ああ、あれが朱徳か。それは、その巨大さとなにか超越した緩慢な動きにおいて妙に納得のいく印象であった。しかしそれにしても、王洪文、張春橋、姚文元などわかいひとたちがいるにせよ、葉剣英、鄧沫若以下、画面で三〇人ほどと思える中央指導者のうち、足どりのおぼつかない人たちの数は少なくない。現代中国が、劉少奇、林彪などの問題でつまずいて中央指導部の世代交代でうけた痛手は、明らかにまだ克服されてはいない。

印象に残ったのは、陳永貴であった。かれは北方の農民の服装で現われたが、その素朴で落着いた素振りには、貧農出身で現場で叩きあげてきた人間がこうした悲痛な場面にぶっかったときにしめす土性っ骨が感じられた。嗚咽をおさえきれず、左手で二度三度と涙をぬぐった姚文元とは、その点でひとつの対照をなしていた。

ラジオに革命歌の番組が増えた。各国からの弔電はつづいている。

一月十五日（木）

九時過ぎ、バスで玉府井の東風市場に出かける。天気がよいので手袋を忘れ、窓から吹きこむ風に手が痛い。阜成門あたりから、家々に半旗が目立つ。旗は大小さまざまだ。バスの窓からみえる工場のなかに、黒枠に黒字の周総理追悼のスローガンが貼られている。

東風市場は、東安市場といった十年前とはすっかり変わって、近代的なマーケットになっている。品物の陳列もスマートだ。ハンド

クリーム、ハンガーなどを買う。

夜、張光珮女史が受講者のひとり、天津南開大学の俞辛焞氏をともなって、明日の井上さんの講義の打合わせにくる。俞氏の日本語は、正確ではないが、達者だ。講義がどうなるやら、はじめてみなければわからぬ。終って部屋に帰ると、今日の周総理追悼大会のニュースの途中だ。追悼文は鄧小平が読んだ。遺骨は遺言で祖国の山河に撒いたという。祖国の大地に還りたいとはこのことか。遺体保存のいちぶ大衆の要求とこれをつなげて考えれば、かれは死後をも自己の信念で律しきったといえるだろう。

一月十六日（金）

八時半から、井上氏の最初の講義。周一良氏の顔がみえる。正規の受講生は三一人だが、聴講者がほぼその同数で、あわせて六〇人あまりで、教室はいっぱい。途中休息して、十一時三〇分まで。講義の最中に、他の教室の講義が休憩になったらしく、階段や玄関の日だまりのあたりがやかましくなり、そのうち教室を間違えたらしくドアをあけるのがいたり、大学の風景はどこもおなじだ。

午後、座談会。まだはなしはかみあわない。受講生は歴史、政治、経済の三グループに分かれているが、政・経グループは独自に周総理追悼学習会を開いていて、座談会は不参加。

一月十七日（土）

九時半ごろ、賓館の郵便局で航空便を出し、切手を一組買う。窓口のわかい女性がぼくにくれる切手を数えながら、ふとみると泣いている。かの女の机の上には、周恩来の一生を讃えた『人民日報』の写真特集のページがひろげてあった。

農村の幹部学校
（左端は歴史学部の王汝豊氏。本文22ページ参照）

バスで西四に出てみる。新華書店をのぞき大通りを歩いてみる。午前中からよくもまあと思うほどの人だ。貸自転車の店（？）をみつける。手続き料二〇銭、一時間内ごとに五銭、一晩過ぎると二〇銭、そんなことが書いてある。中心部分を少し離れると、買物包みを手にぶらぶら歩いている人がぽつぽつになり、春のような陽ざしのなかで掃除のゆきとどいた胡同（横町）から女のひとが出てきたりする。〝忘れられた時間〟といったことばがぼくの頭にうかぶ。

一月二十日（火）

二回目の講義。今日は風がやたらに強い。講義を終って、北大の職員食堂で昼食をとる。ライスは例のパラパラのやつだが、それを一両、二両と重さ（？）で買う。普通四両だというから、遠慮して三両といったら、ドンブリにすりきり一杯あった。それに一両の肉入り饅頭（マントウ）、豆腐ドンブリ一杯、豚肉と野菜の炒めあんかけドンブリ一杯、それ

だけで三〇銭足らず。とても食べきれないので、半分以上つきあってくれた受講生のだれかにたすけてもらうハメになる。が、みているとかれらはじつに食欲旺盛だ。とてつもなく大きなベントウ箱や小型洗面器（？）とおぼしきものにぶちこんで、立ったままかきこんでいるものもいる。全体として、義理にもお行儀よいとはいえぬが、この食堂風景が、とほうもないエネルギーを感じさせることはたしかだ。念のためたしかめてみたが、ここは教職員の食堂であって、学生の食堂はべつのところにあるといった。

一月二一日（水）

午前九時、中国科学院の宋守礼氏来訪。氏には、十年前に三ケ月滞在したとき、終始一貫お世話になった。なつかしい。二メートルちかくもあるかと思われる巨体からさし出すグローブのような手は、十年前とおなじ暖かさだった。すっかり日に焼けて、ついこの間まで農村の五・七幹部学校にいっていたという。今夜、井上氏の友人が北京アヒルの料理をごちそうしますということで、ぼくもご相伴にあずかることになる。

午後北京大学の教育革命展覧会をみる。一般公開に先立つ内部展示だという。今日の見学者は、北京大学で働いている外国人のみ、文化大革命以前は、要するにごく少数の特権エリートを養成するにとどまっていた北京大学が、文革後、広範な労・農大衆に門戸を開き、階級闘争や生産実践と結合して教学をすすめる道を歩むことによってどれほど成果をあげたか、これを各分野にわたって実物で示そうというわけだ。なかには、七四年に来日された歴史学部の王汝豊氏が大興県の五・七幹部学校で豚を飼っておられる写真などもあって、そのサマになっている図柄にほのぼのとしてくる。理科系のことはよくわからぬが、文科系学生がここ数年出版している数多くの書物をみても、十年前にぼくがいたころの北京大学の学生にはこの何十分の一ほどの執筆活動もなかった。労農大衆と結びつくという結びつきかた、その教学・研究上へのはねかえりといったことについてはまだよくわからぬが、とにかく抜本的な改革が志向されているという気はする。各セクションで説明にあたってくれたすばらしい北京語をはなす何人かの解説員は女子学生かと思っていたら、いずれもこの展示のため一時職場を離れている学内の附属工場や学外の工場の労働者だということであった。二時から三時までの予定が、気がつくと四時三〇分になっていた。

夜、麻子英、張光珮両氏の迎えで、王府井の北京烤鴨店へ。車の中で麻子英氏は、中国医学界のあるグループがかならずガン（周総理はガンで没くなった）を征服する誓いをたてたとの事例を紹介してくれた。中国のひとがよく口にする「悲しみを力に変える」とは、たとえばそういうことなのかと思う。各分野、各単位でそのような具体的目標が立てられるのであろう。

烤鴨店に着いてみると、歴史学者の劉大年、黎澍、文学の何其芳などの顔ぶれ。これらの諸氏を、ぼくは十年前に知った。歓談の間に観察してみると、文化大革命をはさむ十年の歳月はこれらのひとびとにとっても重かったにちがいないと思えた。午後の教育革命の展示をこの分野での第一線とすれば、十年前に第一線であったこれらのひとびとは、やはり現在の第一線からは若干ずれた地点にたっているといわねばならない。歴史はやはり、こうして二度とくりかえしのきかぬかたちですすんでゆく。（よしだとみお・文学部助教授）